

論文 Article

埋蔵文化財および歴史資料への理解と教育普及のための 広島大学総合博物館での取り組み —展示・講演会・研究を中心として—

石丸恵利子¹

The Hiroshima University Museum's approach to understanding and educating about buried cultural properties and historical materials: Exhibition, lecture, and research

Eriko ISHIMARU¹

要旨: 本稿では、文化財保護の意義や理解を深めるための博物館活動の取り組みの中から、埋蔵文化財に関わる「展示」、「講演会」、「研究」実績について整理し、その成果や課題から広島大学総合博物館における有効な活動について考察した。「展示」は、企画展や出前博物館、またその巡回展などについて報告し、「講演会」は、全学の学生を主な対象とした文化財保護に関する講演会と、地域の文化財と周辺地域の調査成果を比較したシンポジウムについて紹介した。また、「研究」は、博物館所蔵の資料に加え、周辺遺跡と係わる研究や調査の成果について、展示や講演会と関連付けながら推進していることを述べた。これらの活動によって、地域の文化や資源利用などの歴史について、幅広い年齢層で関心が高められるなどの一定の成果が得られた。それぞれの活動は視点を変えて繰り返し各地で実施していくことや幅広く広報すること、また文理融合的な内容も効果的であることなどを指摘し、広島大学総合博物館における埋蔵文化財に係わる教育普及活動の展望をまとめた。

キーワード: 埋蔵文化財, 教育普及, 大学博物館, 展示, 講演会

Abstract: I report exhibitions, lectures, and research results related to buried cultural properties as a part of museum activities conducted in the last ten years—aimed at deepening our understanding of these properties. I also explain the significance of cultural property protection and consider effective activities based on the results and issues. Special exhibitions at different museums, traveling exhibitions, and lectures on the protection of cultural properties will be introduced to students at Hiroshima University. The university held a symposium comparing local cultural properties of Early modern castle and castle town sites with the results of surveys of Japan's Chugoku and Shikoku regions. Besides the materials in the museum's collection, we are promoting the results of studies and surveys related to the surrounding ruins in conjunction with exhibitions and lectures. We found an increased interest in the history of local culture and resource use among various age groups. Finally, each activity will be held several times in each region from different perspectives and widely publicized to effectively integrate content from the humanities and sciences.

Keywords: Buried cultural property, Education dissemination, University Museum, Exhibition, Lecture

I. はじめに

博物館とは、博物館法第2条において「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」と定義されている。また、大学博物館（ユニバーシティ・ミュージアム）は、文部科学省学

術審議会学術情報資料分科会学術資料部会報告（1996年1月18日）において「大学において収集・生成された有形の学術標本を整理、保存し、公開・展開し、その情報を提供するとともに、これらの学術標本を対象に組織的に独自の研究・教育を行い、学術研究と高等教育に資することを目的とした施設である。加えて、「社会に開かれた大学」の窓口として展示や講演会等を通じ、人々の多様な学習ニーズにこたえることができる施設」と定義され、「単なる学術標本保存施

¹ 広島大学総合博物館：Hiroshima University Museum, Japan

設又は収集した学術標本の展示を主たる目的とする施設ではなく、「収集・整理・保存」「情報提供」「公開・展示」「研究」「教育」の機能を持つことが必要であるとまとめられている。

大学博物館の創立期は1870年代半ばの東京大学「列品室」や理学部附属植物園の設置頃とされ、その後北海道大学農学部附属博物館や秋田大学鉱山学部附属鉱業博物館などの自然系博物館の開設が続き、京都大学文学部陳列館（1914年）や國學院大學考古学資料館（1928年）、明治大学刑事博物館（1929年）などの人文系の博物館も誕生している。当時、これらの博物館は「大学おける研究教育の施設」や「専門性の強い特殊な施設」などとして機能したが、1980年代になると講演会や公開講座が開催され、大学での研究成果を一般に還元する動きがみられるようになったとされる（熊野1996）。明治大学考古学博物館では、1980年代中頃から公開講座を継続して開催しており、一般市民の学問や大学博物館への興味付けが実り、受講生が中心となった友の会を発足するに至っている。博物館活動が大学と市民をまた市民と学問を結ぶ架け橋となることに成功した事例のひとつである。近年では、各大学博物館の特徴を活かしたさまざまな企画展や講演会・講座等が開催されている。埋蔵文化財に係わる実績例として、京都大学総合博物館では大学構内の遺跡の調査・研究成果を紹介するシリーズ「文化財発掘」展示を継続的に実施し、その際は講演会や資料解説などの関連イベントを行っている点が特徴として挙げられる（京都大学総合博物館編2019・2022など）。また、他館との連携展示にも資料を活用している。愛媛大学ミュージアムにおいても、構内遺跡の資料を用いた展示に加え、大学周辺自治体と協力して実施した発掘調査成果の展示、それらに係わるシンポジウムや講演会が数多く開催されている（愛媛大学ミュージアム編2021）。山口大学埋蔵文化財資料館では、生物標本や美術資料なども含めた大学の学術資産継承事業の成果展や県内大学と連携したML（ミュージアム・ライブラリー）特別展、山口県立山口博物館と連携協力した講座などを実施していることが特徴的である（山口大学埋蔵文化財資料館編2020・2022など）。博物館活動の一部は学生スタッフの教育の場となっている事例も認められるなど（梅村・宇治原2020、黒島ほか2022など）、前述した大学博物館の機能を果たすためにさまざまな活動が推進されている。

広島大学総合博物館においては、「広島大学に所蔵する学術標本資料の調査・収集、保存・管理を行い、

それらの研究と展示、情報発信にあたることにより、広島大学の社会貢献や研究・教育の向上に資することを目的とする」と理念を掲げている（広島大学総合博物館編2012）。著者が所属する埋蔵文化財調査部門では、加えて「学内の開発に関わる埋蔵文化財関連業務を行うとともに、総合博物館の目的を達成するために相互に連携した業務」を推進している（広島大学総合博物館編2018）。

「埋蔵文化財」とは土地に埋蔵されている文化財であり、遺跡いわゆる発掘調査で出土した遺物・遺構などの考古資料全般のことを指す。過去の歴史を読み取る証拠品として考古学の研究対象となるが、日本の歴史・文化等の正しい理解のためには欠くことのできないものであり、且つ、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものである文化財のひとつとして文化財保護法で保護の対象となっている。埋蔵文化財は、歴史好きのものにとっては身近なものとして関心が持たれるが、自然や科学に興味があるものにとってはそれらの資料に接する機会はまだまだ少ないと筆者は感じている。関心の度合いは来館者数にも表れており、水族館や動物園などの自然系博物館と比較して人文系の展示施設の来館者は少ない傾向がある。広島大学総合博物館においても本館と埋蔵文化財調査部門展示室の来館者数の実績を2011年度から2013年度の順に比較すると、前者は9,706人、10,833人、12,158人、後者は265人、356人、633人で、大きな開きが認められる（広島大学総合博物館編2018）。

以上のような現状を踏まえ、筆者はこれまでの博物館活動において、文化財保護の意義と理解、身近な歴史・文化への興味付け、研究成果の社会への還元、文化財と生活との関わりあいを伝えるために大学博物館として何ができるかを考えながら様々な事業を実践してきた。本稿では、広島大学総合博物館において、①埋蔵文化財の展示に接する機会を多く作る（＝来館者数を増やす）にはどうすればよいか、②分野を超えた幅広い年齢層が埋蔵文化財への関心を高めるためにはどうすればよいか、③大学博物館としてできる埋蔵文化財に関わる個性的な教育普及事業は何かという博物館の教育普及活動における3つの課題を設定し、これまでの実施事業からそれらの解決のための考察を試みる。

キャンパスをまるごと博物館とみなしたエコミュージアム活動を推進してきた広島大学総合博物館のこれまでの教育普及活動は、常設展に加え企画展や出前博物館などの「展示」、展示や研究に関わる「講演会・講座」、エコミュージアム活動を活かした「フィール

ドナビ」, 所蔵資料を利用した「ワークショップ」, 地域貢献や所蔵資料に関わる「調査研究」, 「学芸員養成プログラム」に大別される¹⁾。上記3つの課題解決のための活動実績の枠組みとして, 本稿ではこれらの枠組みの中から, 埋蔵文化財資料を実際に見てもらう「展示」, 文化財についての様々な話を聞くことによって学んでもらう「講演会」, 所蔵資料およびそれらに関わる調査や成果報告を発信する「研究」について取り上げる。遺跡の場所に立ち当時の景観や暮らしを想像してもらう「フィールドナビ」と技術や文化について自らの手で製作することなどを通して体験的に文化

財について学習してもらう「ワークショップ」, 座学によって地域の文化財や歴史または研究成果について学ぶ「講座」については別稿で改めて論述したい²⁾。

本稿では, 埋蔵文化財調査部門サテライト館展示室開館の2007年度以降の活動の中から「展示」, 「講演会」, 「研究」の3項目について一覧表にまとめ(表1), 著者が着任した2014年度からの事業を中心に成果や課題を整理し, 先に記した3つの課題解決のための広島大学総合博物館での個性的で有効な教育普及事業について展望する。

表1 広島大学総合博物館の埋蔵文化財に関わる教育普及研究活動実績一覧

分類	事業名	実施場所	実施期間	来館参加者数	アンケート有無	著者主担当分	事業内容掲載文献
展示	埋蔵文化財調査室30周年企画「広島大学の遺跡と西条盆地の中世遺跡」	東広島市フジグラン東広島店 * 東広島市教育委員会 共催	2012年1月31日 ～2月19日	1,141名			藤野 (2015b)
	第4回ふむふむギャラリー(第1期) 「震地区で発掘された大学食器」	東広島キャンパス(埋蔵文化財調査部門展示室)	2014年10月10日 ～12月19日	261名	○	○	石丸・大近 (2017b)
	第4回ふむふむギャラリー(第2期) 「震地区で発掘された大学食器 in 震キャンパス」	震キャンパス(医学部医学資料館)	2015年1月20日 ～3月20日	463名	○	○	
	第5回ふむふむギャラリー「江戸時代の海の幸・山の幸-発掘された骨と貝-」	東広島キャンパス(埋蔵文化財調査部門展示室)	2015年7月21日 ～11月7日	279名		○	石丸 (2018)
	「戦争を見てきた食器たち-広島大学から出土した文化財-」	広島市内公民館(舟入, 二葉, 段原, 大河, 仁保, 青崎, 似島公民館), 広島市郷土資料館 * 共催	2015年7月23日 ～2016年3月31日	11,847名	○	○	
	「戦争を見てきた食器たち2016」	広島市大河公民館 * 共催	2016年7月10日 ～8月25日	230名	○	○	
	第9回ふむふむギャラリー「海辺のムラから町へ-地御前南町遺跡-」	東広島キャンパス(埋蔵文化財調査部門展示室)	2016年10月31日 ～12月2日	94名			石丸・藤野 (2019)
	第10回ふむふむギャラリー「広島考古学よもやま展示-広島城跡から出土した文化財-」	広島市舟入公民館 * 共催	2016年11月19日 ～2017年1月22日	1,440名	○	○	
	第12回ふむふむギャラリー(第1期) 「戦争を見てきた食器たち2017」	広島市瀬野公民館 * 共催	2017年7月6日 ～8月5日	877名	○	○	石丸・藤野 (2020)
	第12回ふむふむギャラリー(第2期) 「掘り出された広島戦争遺跡」	広島市牛田公民館 * 共催	2017年8月12日 ～9月3日	1,212名	○	○	
	総合博物館第13回企画展・平成30年東広島市出土文化財企画展「大学と埋蔵文化財～キャンパスの遺跡・発見された文化財の魅力～」	第1期: 東広島芸術文化ホールくらら 第2期: 東広島市出土文化財管理センター展示室 * 東広島市教育委員会 共催 全国14大学の埋蔵文化財調査機関ほか 協力	第1期: 2018年11月7日～12日 第2期: 2018年11月16日～12月15日	1,076名	○	○	
	「赤レンガの医学資料館～陸軍兵器補給廠だった医学資料館で見る広島とヒロシマの医学史～」	震キャンパス(医学部医学資料館) 広島大学原爆放射線医学研究所主催 * 協力(震地区出土資料の展示)	2022年2月21日 ～5月13日	-		○	-
講演会	総合博物館サテライト展示室オープン記念講演「賀茂台地の遺跡を読む」	東広島キャンパス 講師: 河瀬正利(広島大学名誉教授)	2007年5月19日	120名			藤野(2011)
	シンポジウム「安芸地方の中世を探る～中世前期を中心として～」	東広島市民文化センター * 東広島市教育委員会 共催 発表者: 藤野次史(広島大学総合博物館), 吉野健志(東広島市教育委員会), 永田千織(広島大学総合博物館), 新川隆(大田市教育委員会), 鈴木康之(広島県立歴史資料館), 草原孝典(岡山市教育委員会), 青島啓(山口市教育委員会), 柴田圭子(財愛媛県埋蔵文化財センター), 大庭康時(福岡市教育委員会)	2012年2月5日	60名			藤野 (2015b)

講演会	第1回文化財保護に関する講演会 「文化財の保護と活用について」	東広島キャンパス *広島大学学生生活会議主催, 総合博物館共催 講師: 齋藤孝正 (文化庁文化財部)	2015年6月25日	230名		○	石丸(2018)
	第2回文化財保護に関する講演会 「遺跡・史跡と埋蔵文化財 - 遺跡の保護と公開活用 -」	東広島キャンパス *広島大学学生生活会議・総合博物館主催 講師: 妹尾周三 (東広島市出土文化財管理センター)	2015年11月12日	160名		○	
	広島大学環境講演会・第3回文化財保護講演会 「広島大学の自然環境と文化財保護」 *合わせて, キャンパスの自然と遺跡見学会を実施	東広島キャンパス *環境マネジメント委員会・学生生活委員会・総合博物館主催 講師: 塩路恒生 (広島大学技術センター), 沖憲明 (広島県教育委員会)	2016年10月27日	70名		○	石丸・藤野(2019)
	第4回文化財保護に関する講演会 「文化財はみんなのもの - 先人の知恵に学ぶ保存と修復 -」	東広島キャンパス *学生生活委員会・総合博物館主催 講師: 伊藤実 (広島県教育事業団埋蔵文化財調査室)	2017年12月21日	30名		○	石丸・藤野(2020)
	シンポジウム「発見! 掘って分かった城下町の暮らし」	広島市5Days こども文化科学館 *公益財団法人広島市文化財団 共催 講師: 若島一則 (広島市文化財団), 小山泰生 (松江スポーツ・文化振興財団), 竹内裕貴 (香川県埋蔵文化財センター), 石丸恵利子	2018年5月19日	75名	○	○	
	「大学と埋蔵文化財」関連講演会・第5回文化財保護に関する講演会 「地域の貢献する大学博物館 - テュービンゲン大学博物館(MUT)の事例 -」	東広島キャンパス 講師: トーマス・クノフ (テュービンゲン大学)	2018年11月12日	48名		○	
	「大学と埋蔵文化財」関連講演会 「西条盆地の遺跡と広島大学の移転」 「広島大学の埋蔵文化財とその特色」	東広島市民文化センター 講師: 妹尾周三 (東広島市出土文化財管理センター), 藤野次史 (広島大学総合博物館)	2018年12月2日	25名			
	藤野次史教授退職記念講演会「考古学研究と博物館」	東広島キャンパス 講師: 藤野次史 (広島大学総合博物館)	2020年2月15日	113名			石丸(2021)
分類	論文・書籍名	著者名	発行機関	発行年月	担当	掲載文献	
研究成果	「安芸地方における中世陶磁器の研究」	永田千織・藤野次史	広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門	2009年3月		調査研究紀要1	
	「安芸地方における瓦器の研究」	永田千織・藤野次史・八幡浩二		2011年3月		調査研究紀要2	
	「安芸地方における中世須恵器の研究 - 西条盆地の出土資料を中心として -」	永田千織・藤野次史		2012年3月		調査研究紀要3	
	「冠遺跡群における槍先形尖頭器の研究 - 冠遺跡 D 地点第2次調査第 I 文化層出土資料を中心として -」	藤野次史		2013年3月		調査研究紀要4	
	「安芸地方における土師質土器坏・皿類の研究 (上)」	永田千織・藤野次史		2014年3月		調査研究紀要5	
	「安芸地方における土師質土器坏・皿類の研究 (下)」	永田千織・藤野次史		2015年3月		調査研究紀要6	
	「広島大学霞地区出土の「広大病院」食器の研究」	石丸恵利子・大近美穂・西口祐子				○	調査研究紀要6
	「東広島市丸山神社古墳群の測量報告」	藤野次史					調査研究紀要6
	「西条四日市遺跡出土の貝類について」	石丸恵利子		2016年3月		○	調査研究紀要7
	「鏡千人塚遺跡・鏡西谷遺跡出土の中近世煮炊具について」	石丸恵利子・大近美穂		2017年3月		○	調査研究紀要8
	「山口県周南市細野遺跡出土の旧石器時代石器」	藤野次史・山手貴生		2018年3月			調査研究紀要9
	『大学と埋蔵文化財～キャンパスの遺跡・発見された文化財の魅力～』	石丸恵利子編		2019年8月		○	
	「霞地区および広島湾沿岸地域の出土貝類とその利用」	石丸恵利子		2020年3月		○	調査研究紀要11
「陣が平城跡出土の瓦質土器・播鉢片に関する一考察」	梅本健治	2021年3月			調査研究紀要12		
「霞地区出土の防衛食器とその特徴」	石丸恵利子	2022年3月		○	調査研究紀要13		

※埋蔵文化財調査部門 (当時は埋蔵文化財調査室) が総合博物館サテライト館展示室として開館した 2007 年 5 月以降の活動について一覧表にまとめた。
※事業内容掲載文献と論文の掲載文献は、本文末の引用文献に記した。

II. 「展示」—埋蔵文化財を見る

博物館の展示は、大きく自然系と人文系に大別される。一般的に自然系より人文系の方が来館者数は少なく、年齢層も高い傾向があるが、どうすれば幅広い年齢層に関心を持って埋蔵文化財を見てもらえるのか、またより多くの見学の機会が得られるかが課題である。広島大学総合博物館の埋蔵文化財調査部門にある展示室は2007年5月に開館し、オープン初年度は多くの団体が訪問したこともあり約1,364名の来館者があった。しかし、次年度以降2008年から2013年までは、2011年度に実施した埋蔵文化財調査室30周年企画の展示で1,406名に達したものの、年間239名から633名（年平均418人）で推移し、団体の有無やその人数で大きく増減する状況であった。2014年度以降、展示室の来館者数増加のため、また埋蔵文化財を目にする機会をつくるため、さまざまな企画展を実施した。以下、それらの内容について紹介する。

1. 常設展示室での企画展示

(1) 「霞地区で発掘された大学食器」

広島大学病院や医学部などが所在する霞地区や附属小・中・高等学校のある翠地区などの広島市内のキャンパスから出土した近現代資料について広く知ってもらうため、ミニ企画展「霞地区で発掘された大学食器」（第4回ふむふむギャラリー：第1期）を2014年10月10日から12月19日までの約2か月間実施した。昭和30年代に大学病院や食堂で使用されていた「広大病院」銘の入った碗や小鉢などの食器に加え、戦時中に缶詰の役割を果たした陶製の「防衛食容器」、旧陸軍が使用した星章のつけられた「軍用食器」などを展示して紹介した。また、霞地区の歴史および煉瓦組みの建物基礎や石組み桝など、調査時に検出された遺構の写真を用いて調査の様子をパネルで紹介した。会期中、大学祭に合わせて勾玉づくりのワークショップを開催したこともあり、2か月間で261名に常設展を含むキャンパス出土資料を見てもらうことができた。前年2013年度の同時期には4件の団体見学があったためそれには及ばなかったが、2011年度の653%、2012年度の1,186%の来館者数を数えた。

来館者へのアンケートの結果、回答数は十分とはいえないが、65%が東広島市内からの見学者で、県外からもわずかに訪問があった（図1-a）。来館者の年齢層は大学生が70%と大半を占め、広大学生に多く見学してもらったことが分かる（図1-b）。見学のきっかけ

来館者へのアンケートの結果、回答数は十分とはいえないが、65%が東広島市内からの見学者で、県外からもわずかに訪問があった（図1-a）。来館者の年齢層は大学生が70%と大半を占め、広大学生に多く見学してもらったことが分かる（図1-b）。見学のきっかけ

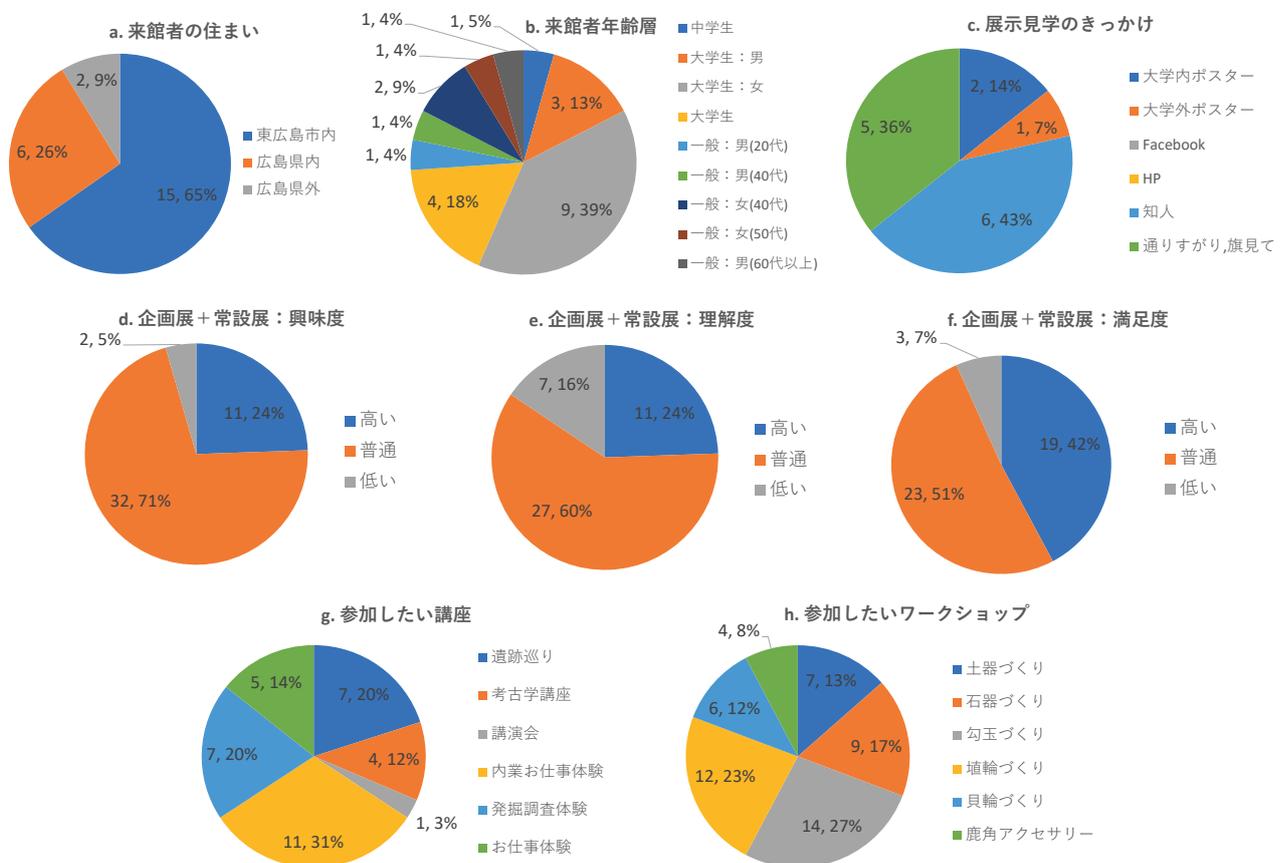


図1 第4回ふむふむギャラリー：第1期「霞地区で発掘された大学食器」の来館者アンケート結果

かけは、知人からが43%，通りすがり（旗を見て）が36%，大学内のポスターが14%の順であり、学生間のネットワークが周知に有効であることがうかがえた（図1-c）。また、2014年度から設置した展示室開館中ののぼり旗も効果があったといえる。ただし、埋蔵文化財に対する興味度や満足度は高いとは言えず、企画展と常設展を合わせた興味度は、高い：24%，普通：71%（図1-d），理解度は、高い：24%，普通：60%であり（図1-e），興味や理解の度合いは普通であるものの、満足度は、高い：42%，普通：51%で高い度合いが増加し（図1-f），展示が一定程度満足するものであったことがうかがえる。また、参加したい講座やワークショップについて聞いたところ、埋蔵文化財に関わるさまざまな体験に興味をもっていることが示された（図1-g・h）。

(2) 「江戸時代の海の幸・山の幸－発掘された骨と貝－」

遺跡から出土するのは土器や石器、金属器などの資料だけではなく、動物遺存体と呼ばれる骨や貝殻なども出土することがある。これらの資料は、当時の人たちが何を食べ、どのように動物資源を利用したのか、その時代の自然環境や食文化などについて教えてくれる重要な文化財である。広島市内霞地区においては貝殻が出土しており、これらの資料に加え、広島市内の近世広島城跡や東広島市西条駅前所在する西国街道を中心に栄えた四日市遺跡（近世・近代）から出土した多様な動物遺存体の展示を通して、当時の文化を理解してもらうことを目的とした企画展「江戸時代の海の幸・山の幸－発掘された骨と貝－」（第5回ふむふむギャラリー）を2015年7月21日から11月7日ま

で実施した。資料の展示には、公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課（以下、広島市文化財団）と東広島市教育委員会の協力を得た。会期中の来館者は279名であった。アンケートは実施していないが、例年同時期よりも来館者数を大幅に増やすことができた。来館者は、2014年度の同時期は前述の大学食器の企画展をしていたため本企画展が下回ったが、2012年度の162%，2013年度の130%を数えた。埋蔵文化財への興味付けにおいて効果的な展示であったといえる。常設展示のみでなく、定期的な資料の入れ替えや、特定の遺物に注目するなどした企画展を繰り返し実施し、出土資料を積極的に活用していくことが必要であろう。

2. 外部機関での出前博物館

展示室への来館者は、東広島市在住者が大半を占めている状況において、広島市内キャンパスの出土品は近年注目されつつある近代資料であるが、広島市内には埋蔵文化財を実見できる常設の展示施設がほとんどない状況にある。これらのことから、身近な地域の出土資料への理解を深めてもらうためには、広島市内での出張展示および巡回展を実施することが必要だと考えた。

(1) 「霞地区で発掘された大学食器 in 霞キャンパス」

前述の広島市内のキャンパス出土の近現代資料や調査の解説パネルの展示について、出土地でもある霞地区の医学部医学資料館の協力を得て、「霞地区で発掘された大学食器 in 霞キャンパス」（第4回ふむふむギャラリー：第2期）として2015年1月20日から3

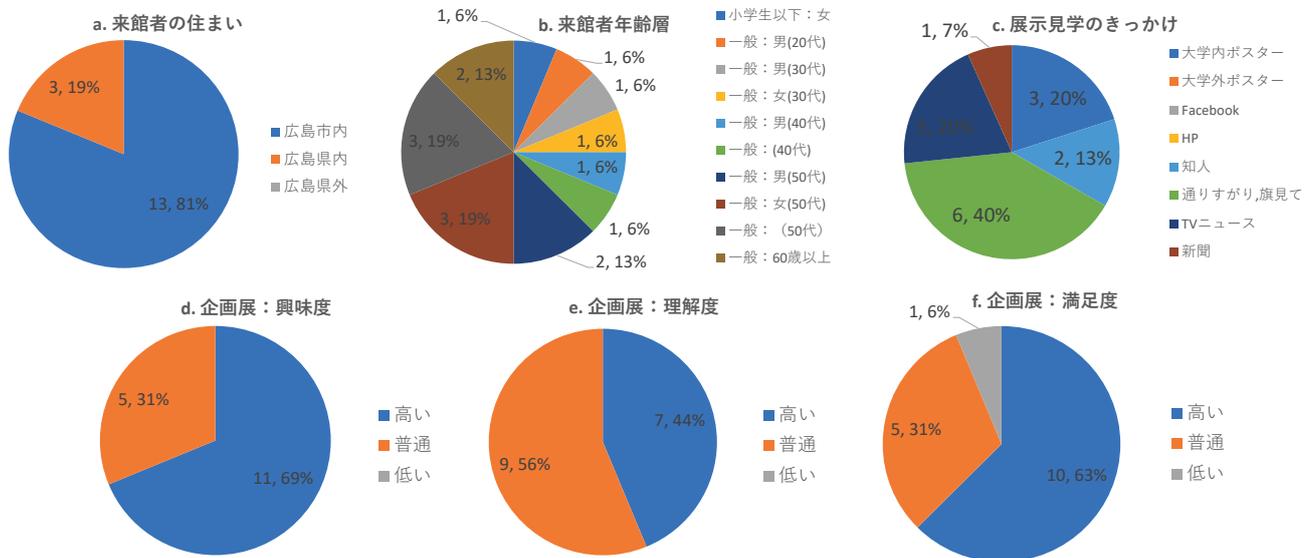


図2 第4回ふむふむギャラリー：第2期「霞地区で発掘された大学食器 in 霞キャンパス」の来館者アンケート結果

月30日までの約2か月間展示をおこなった。同時に、移築して復元整備している石組み桝や排水路も自由に足を運んでもらえるように、案内チラシを作成して現地への見学を促した。

会期中の来館者は463名で、その81%が広島市内在住者であった(図2-a)。年齢層は50代が半数を占め(図2-b)、通りすがりやポスターを見て来館した方が多かったことが分かる(図2-c)。テレビのニュースや新聞を見て訪れた方もおられ、通院患者やお見舞いの方々、広島市内在住者に資料を見てもらう良い機会であったと考えられる。また、興味度(高い:69%)や理解度(高い:44%)、満足度(高い:63%)は東広島キャンパスでの展示と比較していずれも高く(図2-d~f)、地域の身近な文化財について知るうえで出張展示が有益なものであったことが示された。

広大病院や医学部などが位置する霞地区は、当時の軍事施設である旧陸軍兵器支廠(補給廠)があった場所であり、医学部医学資料館はその煉瓦建物の一部を利用して作られていることから、本地点で医学史を語るうえで、地下に眠る遺構や出土した近代資料はかわりが深い。2022年2月21日から5月13日には、広島大学原爆放射線医学研究所主催による資料展示「赤レンガの医学資料館」が医学部医学資料館において開催され、防衛食容器や軍用食器などの出土資料はこの展示にも役立てられた。来館者にも興味深く見学してもらえたようである。霞地区出土の近代資料は、今後も繰り返し展示等で教育普及に活用されることが期待される。

(2) 広島市内巡回展「戦争を見てきた食器たち—広島大学構内から出土した文化財—」

霞地区で出土した資料は広島市に暮らす人たちにとってはより身近な文化財であり、広島市内各所での出前展示をすることによって、これらの近代資料や当時の歴史に関心を持ってもらえるのではないかと考えた。広島市内での発掘調査や郷土の歴史に関する調査を行う広島市文化財団に出前展示について相談し、霞地区のある南区を中心とする公民館や郷土資料館にお声がけいただいた結果、近代広島史の歴史を知る機会になると期待されることや広島三廠(兵器支廠、被服支廠、糧秣支廠)のつながりなどから複数の施設で賛同いただくことができ、共催により各館を巡回する出前博物館を実施するに至った。防衛食容器や軍用食器、統制番号がついた統制食器などは、戦時中の暮らしや文化を知るうえで重要な近代資料であり、中区の舟入

公民館、東区の二葉公民館、南区の広島市郷土資料館と5公民館(段原公民館、大河公民館、仁保公民館、青崎公民館、似島公民館)の計8施設において、2015年7月23日から2016年3月31日までの期間、各施設を巡回して展示を行った。会期中の来館者は合計11,847名に上った。更に次年度以降も、これらの展示に関心を持った施設から要望をいただき、2016年度は大河公民館(2回目)における平和事業の一環として再度資料の展示を行い、2017年度は安芸区の瀬野公民館と東区の牛田公民館においても同様の展示を実施することができた(図3)。各施設の実施期間と来館者数は表1に示したとおりである。

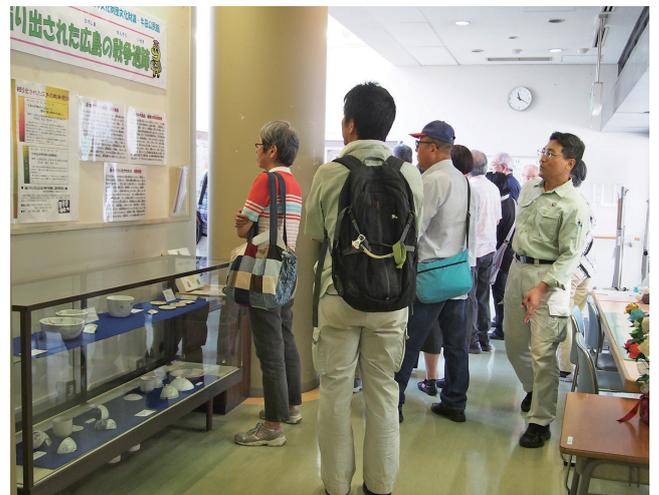


図3 第12回ふむむむギャラリー(第2期)牛田公民館での展示の様子

これらの施設で実施したアンケートの結果、来館者は95%が広島市内在住者で(図4-a)、各公民館に出入りしている地域の方々を中心に展示を見ていただけたことが分かる。広島市以外の方としては、南区の東隣の府中町から1名、三次市から1名の見学者があり、展示内容に関心があれば近隣地域からの見学者も期待でき、広域な広報がより多くの来館者獲得に有効となるであろうことが指摘できる。また、年齢層は60歳以上が最も多く、全体の40%近くを占めており、関心度の高さがうかがえた(図4-b)。一方で、小学生や中学生も全体の4分の1を超えており、広島市内では戦時中の暮らしや歴史に関心が高いことも見て取れた。興味度や理解度も高い傾向があることが示された(図4-c~e)。会場となった公民館に展示準備や解説等で足を運んだ際、出入りする小中学生も多い印象を受け、これらの子どもたちが展示を見てくれた結果と考えられる³⁾。

地域の埋蔵文化財への理解や興味付けを進めるためには、受け身な常設展示にとどまることなく、積極的

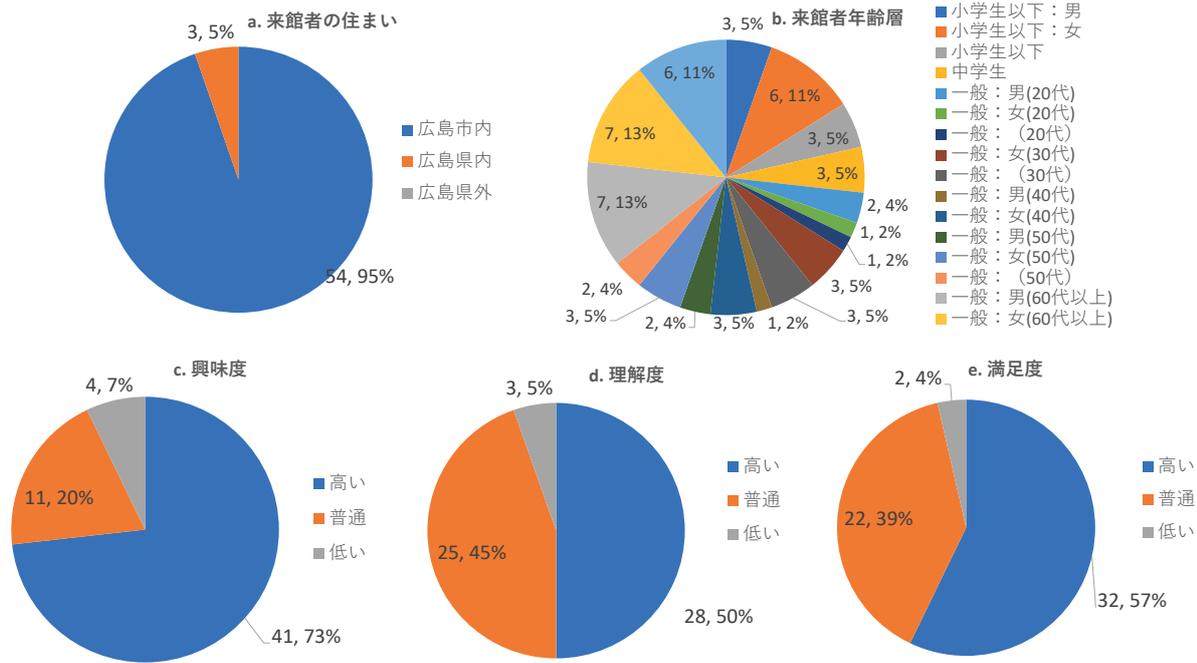


図4 広島市内巡回展「戦争を見てきた食器たちー広島大学構内から出土した文化財ー」の来館者アンケート結果

な企画展や出張展示などを行い、教育普及に努めることが重要である。

(3) 「広島考古学よもやま展示」

歴史や文化に興味を持ってもらうため、また身近に感じてもらう方法のひとつとして、現在の生活とかかわりの深いものをテーマとしたものも有効だと考えられる。石器や土器を並べるだけでなく、それらを用いてどのようなものを獲得して食べたのか、またどのように利用したのかなど、当時の食環境や資源利用、動物との関わりなどがわかる展示が、歴史や文化を分かりやすく伝えるための有益な方法になると考えた。

前述の常設展示で実施した第5回ふむふむギャラリーの内容を発展させ、広島城跡についてより深く知ってもらう展示を企画した。広島市文化財団の協力を得て、広島城跡から出土した瓦や陶磁器類に加え、魚類や哺乳類、貝類などの動物遺存体、動物形の土人形などを展示して、当時の城下での暮らしぶりが分かる「広島考古学よもやま展示」（第10回ふむふむギャラリー）を開催した。舟入公民館において2016年11月19日から2017年1月22日まで実施し、会期中は展示解説や講座も行われたため来館者は1,440名におよび、広島市内では身近な存在である広島城跡から出土した埋蔵文化財への関心の高さがうかがえた（図5）。会期中に開催した関連講座と展示解説に参加した方のアンケートには、「実物を見れて大変良かった」、



図5 第10回ふむふむギャラリー舟入公民館での展示解説の様子

「広島城のことが知れて良かった」、「もっとこのような企画をしてほしい」などの意見が多くあり、広島城の近くに住みながらもあまり情報が得られていない点や、地域の歴史に対する学習意欲が高いことが示されたといえよう。

なお、歴史や文化について、動物学や環境学などの自然科学の視点を加えた文理を融合させた複合的な教育普及の実績としては、自然系博物館や水族館での展示において、歴史や文化を伝える資料として動物考古学の成果を取り入れたものがある。筆者が関わった事例について表2にまとめたが、これらは動物との関わりを知るうえで遺跡出土動物遺存体が役立てられる興味深い事例であるとともに、幅広い年齢層に

表2 他館との文理融合的展示協力一覧

展示名	主催機関	開催日	内容
第39回特別展 「ホネホネたんけん隊」展	大阪市立自然史博物館	2009年7月4日 ～8月30日	さまざまなホネ標本を展示し、ホネを使って学んだり、ホネを楽しんだり、ホネを見る視点を提案し、ホネとかわるさまざまな情報を紹介する展示の解説書『ホネで学ぶ、ホネで楽しむ』において、遺跡から出土する骨から過去の歴史や文化を研究する動物考古学の成果について解説した。また、動物考古学での標本作りの苦労話についても紹介した。
第29回特別展 「うなQウナギの不思議」	和歌山県立自然博物館	2011年7月20日 ～8月31日	ウナギの生態や人間との関わりを紹介する特別展において、日本列島の遺跡出土ウナギ資料のデータを提供し、ウナギとヒトのかかわりの歴史を知ってもらう情報とした。集計したデータは、展示パネルおよび解説書に役立てられた。
特別企画展 「フグふく 河豚～いつからフグは食べられていたのか～」	市立しものせき水族館・海響館	2011年12月10日 ～2012年2月29日	下関の産業を代表するフグとの関わりを紹介する企画展において、日本列島の各遺跡から出土したフグ資料のデータを集計して提供し、フグとヒトのかかわりの歴史を知ってもらう情報とした。出土漁撈具や遺跡の土層断面資料などの考古資料の展示においても情報を提供した。
特別展示 「うなぎのつかみどころ」	葛西臨海水族園	2017年7月20日 ～11月28日	ウナギの生態や研究について紹介する展示において、全国の遺跡から出土したウナギ遺存体の集計データを提供し、ウナギとヒトのかかわりの歴史を知ってもらう情報とした。集計したデータは、パネルや展示図録に役立てられた。
企画展 「文化財を科学する」	5-Days こども文化科学館	2018年7月21日 ～9月2日	5-Days こども文化科学館（広島市）主催の文化財に係る科学分析の成果や魅力を伝える展示において、動物考古学および同位体分析の研究成果を紹介するデータを提供し、展示パネルで紹介された。歴史と科学との関わりの説明に役立てられた。

対する埋蔵文化財や歴史、文化への関心付けとなり、自然科学との関わりが理解できる格好の場でもある。「広島考古学よもやま展示」も、動物との関わりや歴史から広島城や地域の文化財に対する興味を掻き立てるきっかけとなったに違いない。

(4) 「大学と埋蔵文化財～キャンパスの遺跡・発見された文化財の魅力～」

大学が行うキャンパス内の遺跡調査や保護活用について紹介し、埋蔵文化財への理解を深めるため、また他大学の埋蔵文化財調査の実績や研究成果を発信するため、日本全国14大学の関係機関と学内2部門および平山郁夫美術館の協力のもと、東広島市教育委員会との共催により、埋蔵文化財についての企画展を実施した（広島大学総合博物館第13回企画展・平成30年度東広島市出土文化財企画展）。広島大学のキャンパスから出土した遺物を中心に展示して各遺跡の概要をパネルで解説するとともに、14大学（北海道大学、東北大学、東京大学、金沢大学、京都大学、大阪大学、岡山大学、島根大学、山口大学、徳島大学、愛媛大学、九州大学、熊本大学、鹿児島大学）のキャンパス遺跡の調査概要や所属構成員の研究成果についてもパネルで紹介し、近隣7大学（京都大学、大阪大学、岡山大学、島根大学、山口大学、徳島大学、愛媛大学）から貴重な出土資料を借用して展示した。会期中は講演会を2回、土器づくりのワークショップと遺

跡巡りのフィールドナビを各1回実施した。会場となったのは、東広島芸術文化ホールくらの市民ホール（第1期：2018年11月7日～12日、以下くらの）と東広島市出土文化財管理センター展示室（第2期：2018年11月16日～12月15日、以下東広島市文化財センター）で、全会期を通して1,076名の来館があった（図6・7）。



図6 総合博物館第13回企画展「大学と埋蔵文化財」東広島芸術文化ホールくらのの会場入口



図7 総合博物館第13回企画展「大学と埋蔵文化財」東広島芸術文化ホールくらのでの展示の様子

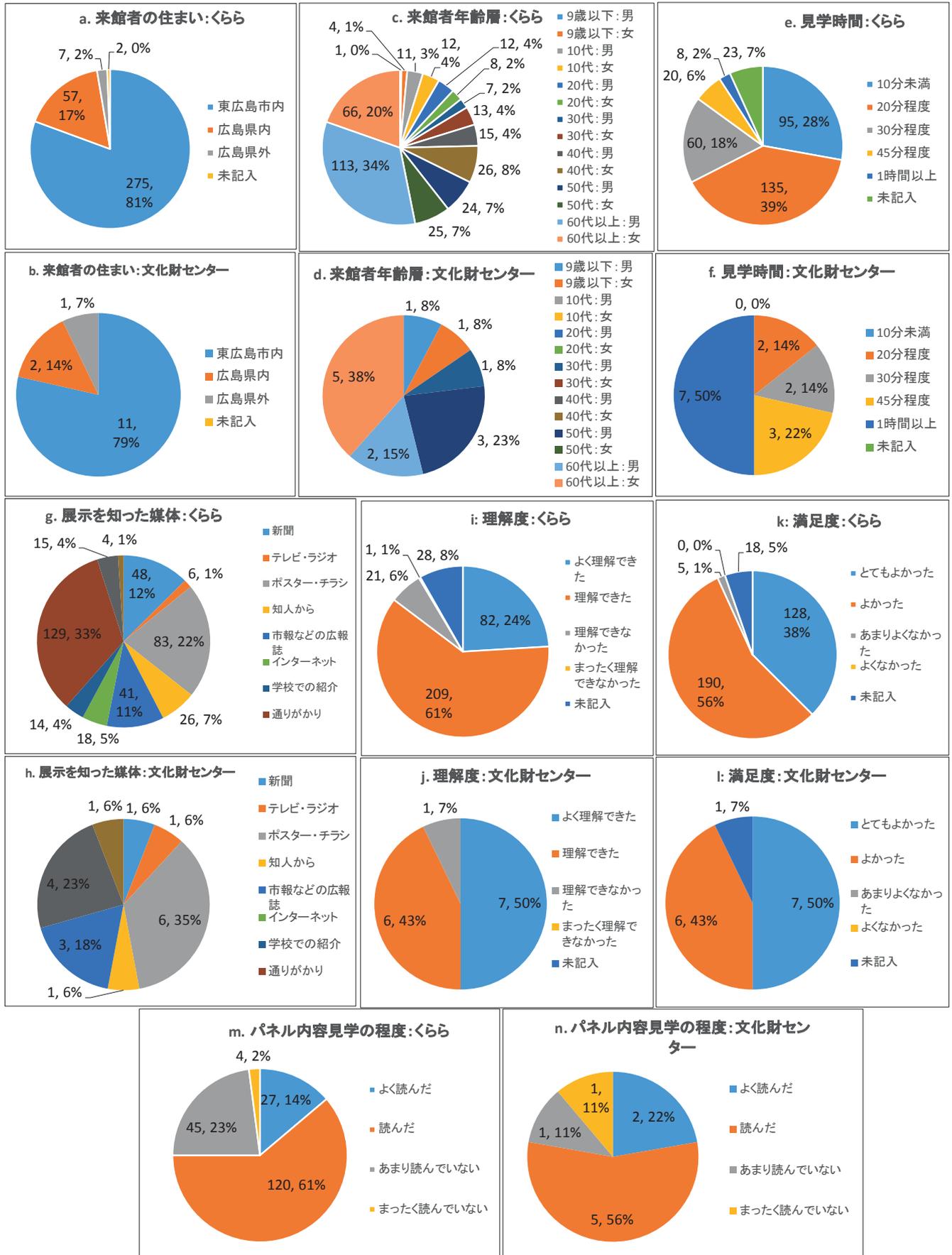


図 8 企画展「大学と埋蔵文化財～キャンパスの遺跡・発見された文化財の魅力～」の来館者アンケート結果

アンケートの結果、来館者は東広島市在住者が81%を占めたが、県内他市町村や県外からも足を運んでくれた人が多かったことは幸いであった(図8-a・b)。年齢層はいずれの会場も60代以上が半数を占めたが(図8-c・d)、会場によって見学時間に差が認められた。くらはでは展示以外を目的として訪れた人が多いことから、見学時間は20分以下が60%を超えているが、東広島市文化財センターでは本展示を目的としてきた人が大半であることから、1時間以上見学された方も多く認められた(図8-e・f)。ポスターやチラシ、市の広報誌、新聞記事が広報としては有効であったようである(図8-g・h)。また、展示の理解度や満足度はおおむね良好であったといえるが(図8-i~l)、パネル閲覧の程度については、やや文字が多かった影響もあり、あまり読んでいない方が25%程度は認められた(図8-m・n)。幅広い年齢層に、いかに簡潔に、多くの情報を分かりやすく伝えることができるのかについては、今後の課題でもある。

また、意見・感想欄には、文字が小さかった、あるいは文字が多かったなどの指摘もあったが、全国の大学の資料が見れたことがよかったことや、今後様々な企画展を期待する記述が多く認められた。常設展示を公開しているだけでは、埋蔵文化財や歴史への理解は進まず、今後は、多様なテーマで、またなかなか見ることができない各地の貴重な資料も用いるなどして、幅広い年齢層に向けた企画展を継続的に繰り返し実施することが望まれていると改めて感じた。

本企画展は、多くの人に各地のさまざまな埋蔵文化財について知ってもらえたことに加え、各大学と多くの情報交換を行うことができたことも大きな成果のひとつである。今後、各大学と連携した魅力ある展示や調査、研究、教育普及が進むことが期待できる。また、本企画展の展示パネルには、各大学キャンパスにある遺跡の調査や研究についての取り組みがわかるさまざまな情報が含まれていたことから、企画展を見に来られなかった人たちが、今後も広く情報を発信するために、パネルにまとめられた15大学の調査概要と研究成果を1冊の冊子にまとめて発行した(石丸編2019)。この冊子の情報は現在も教育普及に活用している。

また、本企画展は、大学構内の埋蔵文化財を調査する組織が設置されている全国16大学が、情報や課題を共有し横のつながりを構築するための連絡協議会設置に向けての契機となった⁴⁾。これまでも大学埋文の連携への動きは過去に何度もあったと聞いているが、本企画展が大学間のよりよい連携や各大学埋文の

発展に向けての魅力ある取り組みへと前進したのであれば幸いであり、今後の展開に期待したい。

Ⅲ. 「講演会」—話を聞いて文化財を学ぶ

1. 文化財保護に関する講演会

埋蔵文化財は歴史好きの人たちやそれらを研究対象とする者だけでなく、すべての人たちの生活と関わりを持つものである。遺跡(包蔵地)として登録されている場所を無許可で掘削や改変すること、また文化財として指定を受けている建造物を破壊することは、文化財保護法違反となり、5年以下の懲役もしくは禁錮または100万円以下の罰金が科せられる。文化財は貴重な国民の財産であることから厳しく罰せられることになるが、文化財がどのようなものかを理解しなければ、意図せず法律違反をしてしまうことになる。

広島大学ではかつて在学生が史跡公園内にタイムカプセルを埋めたことが問題となり、大学には行政から継続して在学生に文化財について学ばせるよう指導が入った。この事件を契機として、全学の学生を対象に文化財保護に関する講演会が行われることとなった。本学の学生生活会議(現学生生活委員会)と総合博物館が連携し、これまでに5回の講演会を開催した(表1)。文化財行政に従事し、保存活用の指導に携わってきた有識者に講師を依頼し、文化財とは何か、また保護の目的や法律などの基礎知識、保護と活用の実態などについて講演して頂いた。第3回目には自然環境保全についての話も交え、自然と歴史の両者に関わる文化財の保護について理解を深める機会となった(図9)。また座学だけでなく、講演会後にはキャンパスの自然と遺跡を巡る見学会を実施し、参加者は身近に貴重な自然と文化財があることを体験的に学ぶことができるものとなった。

以上のように、文化財は私たちの身近に存在するも



図9 広島大学環境講演会・第3回文化財保護講演会の様子

のであり、すべての人が文化財についての知識を持っていないければ、知らないうちに法を犯してしまうことになるため、大学としてすべての学生に対して繰り返し文化財について学習する機会を提供することが望まれる。例えば、将来土地開発や建築系などの仕事に携わる学生が困らないため、また将来教師になる学生が子どもたちへの教育で困らないため、日々暮らす地域や観光地で文化財を破損することがないように、文化財について学ぶことは全ての学生に必要な知識となるに違いない。文化財保護に関する講演会開始の契機は残念なことではあったが、この機会を文化財への理解や保護の意味を広く周知するための活動のチャンスととらえ、繰り返し実施していくことが必要である。教養ゼミなど、教養教育として授業の一環に組み込むことも有効であろう。また、講演会を聴講する機会は広く一般にも公開し、継続して文化財についての教育普及の役割を担うことが開かれた大学として期待される。

2. シンポジウム「発見！掘って分かった城下町の暮らし」

文化財について理解を深めるには、文化財に関わる調査や学術研究の成果から知識を得ることも有益な方法のひとつである。近年各地で発掘調査が進められている近世の城跡・城下町遺跡の調査成果から、近世の歴史や暮らしぶりを学ぶシンポジウムを、広島城近くにある5-Days こども文化科学館において2018年5月19日に開催した(図10)。シンポジウムでは、広島市の広島城跡、松江市の松江城下町遺跡、香川県の高松城跡と丸亀城跡の発掘調査によって得られた成果が発表された。また、それらの遺跡から出土した動物遺存体によって明らかとなった各城下町での動物資源利用の様相についても紹介された。身近な広島城跡での近世の暮らしや文化について知ることができたとともに、各地の近世城下町の最新の発掘調査成果についても学ぶことができる機会となった。



図10 シンポジウム「発見！掘って分かった城下町の暮らし」全体討論の様子

アンケートの結果、参加者は90%が広島市内在住者で(図11-a)、年齢は約60%が60代以上であったが、少数ながら10代から各年代の参加者が足を運んでくれた(図11-b)。「それぞれの地域での城下町成立の様子が分かり、比較できたのが良かった」や「各々の城下町の形成に特徴があり興味深い内容だった」など、各地の城下町の歴史について一度に知ることができたことを喜ぶ感想が多く認められた。満足度としては75%が良かったと答えたが、普通と答えた人は、「もっと時間をたっぷり使って講座を企画して」や「発表の時間が足りない/短い」などの感想を持たれた参加者であった(図11-c)。また、「出土品も合わせて展示して見ることができる講演会を」や「広島歴史に関する話が聞きたい」、「発掘調査自体の苦労や裏話など聞いてみたい」など、シンポジウムを通して多くの人が文化財や発掘調査についてより関心を深めたことがうかがえる。オットセイやフグなど、具体的な出土事例から考察した食環境や動物との関わりについての話は、これまでほとんど動物考古学の成果を聞いたことがなかった人には新鮮であったようで、さまざまな話が聞きたい人が非常に多くいることが分かった有意義なシンポジウムであったといえる。

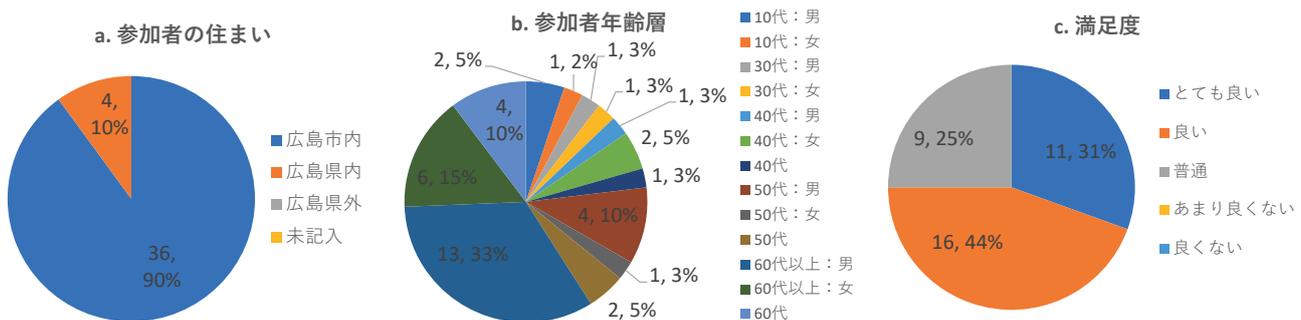


図11 シンポジウム「発見！掘って分かった城下町の暮らし」の参加者アンケート結果

なお、広島市では広島城周辺の開発が進み、2015年11月から2017年3月まで名勝平和記念公園内遺跡広島平和資料館本館下地点の発掘調査が行われ、また中央公園広場のサッカースタジアム建設予定地では2020年10月から旧陸軍の輸送部隊中国軍管区輜重兵補充隊（輜重隊）の施設の跡の発掘調査が行われ、近代遺跡が注目を集めている。これらの調査を契機に、広島市では2022年7月1付けで明治期以降の軍都広島歴史を伝える主要な軍関係の機関・施設等の遺跡について、その歴史的価値を鑑み埋蔵文化財として取り扱うことを決めた。それにより、広島市にある霞地区も「広島陸軍兵器支廠跡（補給廠跡）」として広島市が正式に遺跡（包蔵地）として取り扱うこととなった。身近な歴史や文化について知りたい人が多いことから、今後、最新の研究成果を含むさまざまな視点からの講演会を、広く一般を対象として繰り返し実施していくことも、文化財への理解を深める方法のひとつであろう。

IV. 「研究」—キャンパス遺跡の研究から文化財を学ぶ

1. キャンパス遺跡の研究

広島大学では、東広島キャンパスには旧石器時代から近世・近代まで、また広島市の霞地区には近代の遺跡が存在する。また附属小・中・高等学校のある翠地区でも近代の遺物が出土している。これまでの調査でさまざまな遺構・遺物が確認され、記録保存や遺跡の整備を進めるだけでなく、これらを対象とした研究も進められている。キャンパス遺跡に関わる研究の成果の一部は、『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』において情報発信されている（表1）。第1号からは中世の陶磁器や須恵器、土師質土器などが整理報告され、西条盆地における中世の土器研究が進められた（永田・藤野2009, 2014, 石丸・大近2017a, 梅本2021など）。中世の研究成果については、安芸地方の様相を探るシンポジウムにおいても成果発表が行われている（藤野編2012）。その後は、霞地区出土資料を中心に「広大病院」銘のある病院食器、出土貝類、防衛食容器などについての研究成果をまとめ、霞地区あるいは周辺地域を含めた縄文・弥生時代や近代など当時の歴史、文化の様相を明らかにしている（石丸ほか2015, 石丸2020, 2022）。その内容は展示や各種講座等でもテーマとして取り上げ、広く一般に情報を発信している。前述の企画展示「霞地区で発掘された大学食器」や「戦争を見てきた食器たち—広島大学構内から出土した文化財—」などはその一例であり、論文

の抜き刷りはその後の関連展示で配布して活用している。キャンパス遺跡の所蔵資料の研究については、今後も近代や弥生時代の土器研究などで成果が期待できる。

2. キャンパス遺跡に関わる地域の文化財の研究

キャンパス遺跡から出土した資料に関連した研究や、構成員が携わった測量・発掘調査などの成果についても『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』に掲載し、身近な埋蔵文化財の整理報告と学術研究を進めることによって社会的責務を果たしている。東広島市丸山神社古墳群の測量調査の報告や山口県周南市細野遺跡出土の旧石器の研究報告、東広島市四日市遺跡出土貝類の研究報告などがあげられる（藤野2015a, 藤野・山手2018, 石丸2016）。キャンパス遺跡とそれに関連する遺跡や遺物の研究成果は、対象資料を用いた企画展を実施すること、あるいは展示に用いた資料についての研究成果をまとめるなど、研究と活用を関連付けることで両者の充実を図ってきた。前述した企画展示「江戸時代の海の幸・山の幸—発掘された骨と貝—」や「広島考古学よもやま展示」などはその一例である。シンポジウム「発見！掘って分かった城下町の暮らし」でも研究成果を紹介している。また、これらの成果を広く発信する講座やワークショップなどの活動についても実施しており、これらについては別稿にて詳細に報告して考察する予定である。

V. 考察—広島大学総合博物館における埋蔵文化財にかかわる教育普及の成果と展望

1. 各事業の成果

「展示」では、多くの人に、また幅広い年齢層に関心を持ってもらうために実施した企画展について報告した。広島市内で注目されつつある近代遺跡に注目した防衛食容器などの遺物や発掘調査の解説展示、またそれらの出前博物館（出張展示や巡回展）、食環境や動物などの生活にかかわりの深い遺物に注目した展示、全国の大学埋文組織と連携した各大学の取り組みや研究の成果を発信する展示活動などからは、出前博物館などの開催場所を工夫した積極的な取り組みを繰り返し実施することで、埋蔵文化財資料や地域の歴史に関心が深められることが示された。また、展示場所に加え、幅広く広報を行うことや、地域に密着した個性的な展示あるいは文理融合的な内容にすることで、年齢層についても広がる可能性が認められた。さらには、共催あるいは協力機関との連携も深まり、新たな展示へと展開させることができたことも大きな成果で

あったといえる。

「講演会」では、分野に関係なく幅広い年齢層に文化財保護の意義やそれらへの理解を伝えるためには、大学での全学的な講演会が非常に有意義であること、また、地域に密着した学術研究や比較できる身近な関連資料の研究成果を発信するシンポジウムなどが、歴史や文化への興味および関心を高める機会のひとつとなることが示された。

また「研究」では、各関係機関に所蔵されている身近な文化財の調査研究によって、新たな発見や研究成果を発信し続けることも、学術の発展のみならず身近なところに貴重な文化財があるということを周知するための、また関心を高めるための有効な手段であることが指摘できた。

以上のように、これまでの「展示」、「講演会」、「研究」活動によって、僅かではあるが、埋蔵文化財への理解を深めた人が増えたと期待している。常設展示室や企画展示への来館者数は、2007年の開館記念事業以降減少していたが、出前博物館や講演会等を積極的に実施した2014年度から2018年度は、各展示の来館者数を増加させることができたといえる（図12）。

2. 展望

最初に設定した3つの課題について、一つ目の「埋蔵文化財の展示に接する機会を作る」には、出前博物館などの出張展示を各地で開催することやテーマを設

定した企画展が有効であったといえる。埋蔵文化財調査部門の展示室は約20㎡の広さしかないことから、一度に受け入れられる人数も限られるため、人が集まりやすい場所での出前博物館が展示に接する良い機会になるといえる。内容についても、広島大学の埋蔵文化財に係わる資料をはじめ、それらと関連付けた地域の歴史を学べるもの、または最先端の研究成果を交えた内容を分かりやすく伝える展示を実施していくことが今後も必要だということが指摘できる。また、各自自治体（教育委員会や博物館など）や大学（学内の考古学研究室を含む）などの関係機関と連携することによって、より魅力ある展示が期待できるであろう。

また、これまでの活動実績とそのアンケート結果を通して、「もっとこのような展示を行ってほしい」との意見が多く認められ、特に広島市では実際の埋蔵文化財資料を実見できる機会や時間が少ないのではないかと感じた。また東広島市においても、決して幅広い年齢層に実見の機会が多いとまでは言えず、これらの教育普及活動は今後も継続していく必要があり、大学博物館としては各地域で活動を実施していくことが大切なことだと考えられる。さまざまな視角による展示は、日常生活や自然などと関連付けるなど、分かりやすい内容に努めることが、二つ目の「分野を超えた幅広い年齢層に埋蔵文化財への関心を高める」ためには有効だといえる。また、興味を持つ内容や目を通す媒体は年齢層によって異なることから、さまざまな媒

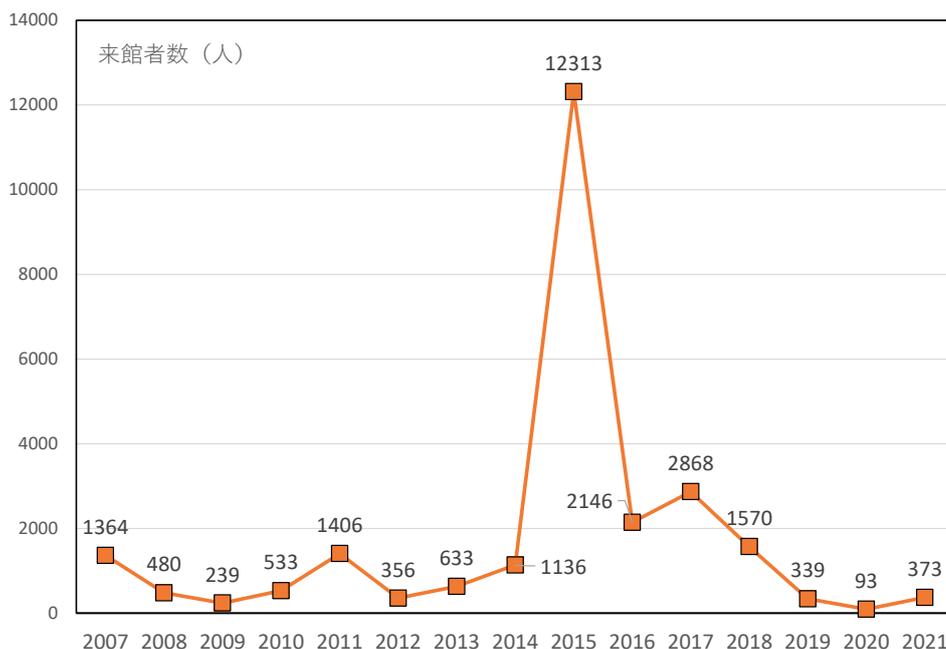


図12 埋蔵文化財調査部門年度別展示（常設展・企画展）来館者数の推移

* 来館者数には各年度に実施した出前博物館の来館者も含む

体で幅広く広報することが必要であろう。

さらに、「分野を超えた幅広い年齢層に埋蔵文化財への関心を高める」ことと三つ目の「大学博物館としてできる埋蔵文化財に係る個性的な教育普及活動」として、文化財保護に係る講演会や研究成果を含むシンポジウムなどの活動が有効であることも指摘しておきたい。文化財保護に係る講演会は、在学生だけでなく一般市民も対象として継続して実施することが文化財について理解を深めるために非常に有益であり、大学博物館としての個性的な活動だといえる。また、前述した展示においても、研究の成果を分かりやすく伝わるよう努めることで、埋蔵文化財や歴史研究への関心を高めることができると考えられる。これらの活動は、広く生涯学習の場となることが期待でき、今後も根気強く継続して実施していくことが重要である。

また研究についても、その成果を蓄積するだけでなく、それらに係わる展示や講演会で内容を分かりやすく解説し、論文の抜き刷り等を配布することなどが、幅広い年齢層が埋蔵文化財への関心を高める機会となり、大学博物館の個性的な教育普及活動のひとつだといえる。

以上のように、広島大学総合博物館において、埋蔵文化財に関わるさまざまな視点からの展示やそれらに係わる講演会やシンポジウム、研究成果を発信することは、歴史資料への理解と教育普及のための重要な活動であることを指摘した。コロナ禍により、2019年度から来館者が激減した(図12)⁵⁾。その間、オンラインやデジタルデータの利用も進み、今後はこれらを活用した埋蔵文化財に係わる教育普及も広く展開していくであろう。今回は展示と講演会、研究の活動から得られた成果と考えをまとめたが、幅広い年齢層の取り込みにはフィールドナビやワークショップなどの体験的なイベントが非常に有効であることが、これまでの活動実績やアンケート結果で確認できている。これらの成果については稿を改め、広島大学総合博物館における埋蔵文化財への理解や歴史、文化への関心を高めるための教育普及活動の効果についてまとめて論述したい。

謝辞

本稿で報告したすべての活動は、本学博物館の構成員をはじめとする学内関係者、広島県や東広島市、広島市の各教育委員会、公益財団法人広島市文化財団、全国の大学関係機関に所属する方々のご理解とご協力により実施できたものである。また、査読者の方からは有意義なご助言をいただきました。ここに、厚くお

礼を申し上げます。

註

- 1) これらは文部科学省が定義する大学博物館の5つの機能のうち、「収集・整理・保存」以外の「情報提供」「公開・展示」「研究」「教育」に関わる活動である。
- 2) 筆者は、大学の授業に関わる教育活動には従事していないため、学芸員養成プログラム以外での大学博物館が求められる、あるいは期待されると考えられる埋蔵文化財に関する教育普及活動について報告する。
- 3) 広島市内巡回展におけるアンケートは7公民館の結果であり、広島市郷土資料館ではアンケートが行えていない。郷土資料館では小中学校などの団体見学が行われていることから、アンケートを行っていただければさらに小中学生の比率は増加した可能性がある。
- 4) 現在大学構内の埋蔵文化財の調査研究を行っている機関は、企画展で紹介した15大学に同志社大学を加えた計16大学である。企画展に同志社大学の実績を入れることができなかったのは、本企画展を中心となって準備した著者にとって痛恨の極みである。この反省を今後何らかの機会に活かしたい。
- 5) 埋蔵文化財調査部門の展示室は、コロナ禍により、2020年3月4日から7月5日および2020年12月24日から2021年2月7日の間、閉館した。また、企画展や多くの人が参加するイベントは実施していない。

引用・参考文献

- 石丸恵利子 (2016) : 西条四日市遺跡出土の貝類について, 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 7, 1-20.
- 石丸恵利子 (2018) : 普及・教育・研究活動報告 (2015年度), 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 9, 73-98.
- 石丸恵利子編 (2019) : 『大学と埋蔵文化財～キャンパスの遺跡・発見された文化財の魅力～』, 広島大学総合博物館
- 石丸恵利子 (2020) : 震地区および広島湾沿岸地域の出土貝類とその利用, 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 11, 1-23.
- 石丸恵利子 (2021) : 普及・教育・研究活動報告 (2019年度), 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 12, 83-96.
- 石丸恵利子 (2022) : 震地区出土の防衛食容器とその特徴, 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 13, 1-38.
- 石丸恵利子・大近美穂 (2017a) : 鏡千人塚遺跡・鏡西谷遺跡出土の中近世煮炊具について, 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 8, 1-42.
- 石丸恵利子・大近美穂 (2017b) : 普及・教育・研究活動報告 (2014年度), 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 8, 101-127.

- 石丸恵利子・大近美穂・西口祐子 (2015) : 広島大学霞地区出土の「広大病院」食器の研究, 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 6, 71-95.
- 石丸恵利子・藤野次史 (2019) : 普及・教育・研究活動報告 (2016年度), 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 10, 25-48.
- 石丸恵利子・藤野次史 (2020) : 普及・教育・研究活動報告 (2017・2018年度), 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 11, 121-159.
- 梅村綾子・宇治原妃美子 (2020) : 大学博物館の特徴を生かした教育普及活動とその運営組織構築に向けて－学生とともにつくる－, 名古屋大学博物館報告, 35, 13-21.
- 梅本健治 (2021) : 陣が平城跡出土の瓦質土器・播鉢片に関する一考察, 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 12, 1-12.
- 愛媛大学ミュージアム編 (2021) : 愛媛大学ミュージアム開館10周年記念誌
- 京都大学総合博物館編 (2019) : 京都大学総合博物館ニュースレター, 45
- 京都大学総合博物館編 (2022) : 京都大学総合博物館ニュースレター, 55
- 熊野正也 (1996) : 大学博物館の社会的な係わりとその接点, 明治大学博物館研究報告, 1, 3-14.
- 黒島健介・鎌田沙希・弘松瑤希・清原愛・趙玲美・南葉鍊志郎・藤原伊織・吉朝開・大崎壮巳・吉本穂波 (2022) : 学生スタッフによる企画展示の作成と実施～美術館への出張展示を例として～, 大学博物館等協議会2022年度大会第17回日本博物科学会大会案内・要旨集, 18.
- 永田千織・藤野次史 (2009) : 安芸地方における中世陶磁器の研究, 広島大学埋蔵文化財調査室調査研究紀要, 1, 1-86.
- 永田千織・藤野次史 (2012) : 安芸地方における中世須恵器の研究－西条盆地の出土資料を中心として－, 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 3, 1-116.
- 永田千織・藤野次史 (2014) : 安芸地方における土師質土器
 坏・皿類の研究 (上), 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 5, 1-52.
- 永田千織・藤野次史 (2015) : 安芸地方における土師質土器
 坏・皿類の研究 (下), 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 6, 1-70.
- 永田千織・藤野次史・八幡浩二 (2011) : 安芸地方における瓦器の研究, 広島大学埋蔵文化財調査室調査研究紀要, 2, 1-108.
- 広島大学総合博物館編 (2012) : 広島大学総合博物館自己点検・学部評価報告書 平成18年度－22年度
- 広島大学総合博物館編 (2018) : 広島大学総合博物館自己点検・学部評価報告書 平成23年度－28年度
- 藤野次史 (2011) : 普及・研究活動 (2007年度), 広島大学埋蔵文化財調査室調査研究紀要, 2, 153-162.
- 藤野次史編 (2012) : 『シンポジウム安芸地方の中世を探る～中世前期を中心として～』, 広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門・東広島市教育委員会
- 藤野次史 (2013) : 冠遺跡群における槍先形尖頭器の研究－冠遺跡D地点第2次調査第I文化層出土資料を中心として－, 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 4, 1-84.
- 藤野次史 (2015a) : 東広島市丸山神社古墳群の測量報告, 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 6, 97-134.
- 藤野次史 (2015b) : 普及・研究活動 (2011年度), 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 6, 165-190.
- 藤野次史・山手貴生 (2018) : 山口県周南市細野遺跡出土の旧石器時代石器, 広島大学埋蔵文化財調査研究紀要, 9, 1-22.
- 山口大学埋蔵文化財資料館編 (2020) : てらこや埋文, 令和2年春号
- 山口大学埋蔵文化財資料館編 (2022) : てらこや埋文, 令和4年春号

(2022年8月31日受付)

(2022年12月22日受理)